

養蜂めぐり歩き <その6>

イラン・ゲシュム島での在来養蜂

ペルシャ湾ホルムズ海峡に浮かぶイラン・ゲシュム島は、ペルシャ湾最大のハラ・マングローブ林や島内の景勝地などの自然資源によりユネスコのジオパークに登録されている。筆者はそこで自然環境の保全を重視した「エコ・アイランド構想」による地域開発マスタープラン策定において、島内農民の生計向上に資する観光振興に係るマングローブ蜂蜜の生産組合形成を企図したパイロットプロジェクト準備情報収集を実施したが、その際に得たゲシュム島の在来養蜂についての知見を紹介したい。

イラン本土の在来種であり、近代養蜂に適したセイヨウミツバチ (*Apis mellifera*) は気温が 50 度を越える事もある島内には生息しておらず、高温・乾燥環境下に適応したコミツバチ (またはヒメミツバチ/ *Apis florea*, 英名 dwarf honey bee) が確認されている (Hepburn 他、2005)。コミツバチの分布はアジア大陸の東西に広く分布し、西限はペルシャ湾周辺とされる (高橋、2006)。

この *A. florea* は現生ミツバチの種間進化系統推定 (高橋、2005) に依れば、今から大凡 3500-4000 年前にインド・ヨーロッパ地域で現れたミツバチの祖先に近い最も原始的なグループに入り、コミツバチ亜属 *Micrapis* が持つ一枚巣板、開放空間への営巣習性などはミツバチ属 *Apis* 共通の原始形質であるとされ、後代の種分化の過程でセイヨウミツバチ *A. mellifera* を含むミツバチ属が持つ樹洞 (閉鎖空間) 営巣性や複数巣版などの近代養蜂技術が利用した派生形質を獲得したと考えられている。コミツバチにおいてはその原始的な開放空間営巣習性もあり所謂近代的養蜂技術として採用される可動式巣箱を用いた飼育方法は殆んど成功していない (吉田、2000)。

イラン本土に於いてはセイヨウミツバチによる養蜂も盛んに行われ、伝統的な巣箱の使用などを含む技術体系も発展していたが、コミツバチ養蜂については粗放的な慣行養蜂が続いている。

ゲシュム島内での慣行技術として筆者が視察した養蜂家では、Honey house と称したセメントブロック造りの納屋にビニールシートなどで簡単な間仕切りをし、壁面に開けた穴の正面に天井から平行に吊るした 2 本の PVC パイプに採取した巣板の一部を挟み込む様に取り付ける。一つの間仕切りに巣板は一つだけ設置し其々巣板の前に温度管理の為の扇風機を下げていた。PVC パイプを吊るしている紐の天井接続部分には、蟻除けに油の入った缶が設置される。



巣板の上部は貫通した木の枝などで PVC パイプにぶら下げられている。

養蜂樹種はマングローブ (*Phizophora mucronata*) だけでなく、アカシア属 *Acacia* やナツメ (*Zizyphus jujube*) の地中海原産の近縁種 Lotus Tree (*Z. lotus*) などがあり、市街地の漢方薬局では Lotus tree 蜂蜜が 750cc 瓶詰で IRR 1,500,000 の処、マングローブ蜂蜜は良質な物で IRR 3- 4,000,000 (IRR 30,000/ US \$: 2016 年 7 月時) と倍の値段が付いていたが、マングローブ蜂蜜は蜜源植物の生育場所により蜜が塩気を含むものとなり地元住民は Lotus tree やアカシアの蜂蜜を好むとの事であった。

樹種によるが主な収穫時期は 3 月中旬のイラン暦の正月頃から 6 月までの約 4 か月間で、一つの巣房が増築され収穫 (採蜜) 出来るまでの約一か月で大体 1kg の蜜が採れ、訪れた養蜂家では樹種に依らず上記の収穫期 1 シーズンで 20kg 採れば十分な収入になる、との事であった。

結局、本件はパイロットプロジェクトとしては起案できる条件が揃わなかったが、準備・情報収集を通して、大変興味深い在来 (慣行) 養蜂を知ることが出来たのは収穫であった。